

作況ニュース（第6号）

水 稲
大 豆

（発行：令和6年7月19日）（編集：令和6年7月18日）

発行：秋田県農林水産部

水 稲

草丈長く、葉色やや濃い、適切な栽培管理を

－出穂は平年より早まる見込み－

－斑点米カメムシ類防除の徹底－

1 今後の気象の見通し

（1）東北地方1か月予報（7月20日～8月19日）【令和6年7月18日 仙台管区气象台発表】

＜予想される向こう1か月の天候＞

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。東北日本海側では、期間の前半は、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率80%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目（7月20日～26日）は高い確率80%、2週目（7月27日～8月2日）と3～4週目（8月3日～8月16日）は高い確率50%です。

次回の予報発表予定：1か月予報 毎週木曜日14時30分

3か月予報 7月23日（火）14時

【季節予報】

https://www.jma.go.jp/jp/longfcst/102_00.html

2週間気温予報 1週目の予報は随時更新

2週目の予報は毎日14時30分に更新

<https://www.data.jma.go.jp/cpd/twoweek/?fuk=32>

2 県内の概況

（1）気象経過

【秋田地方气象台】

7月上旬：この期間、前線や低気圧の影響により曇りや雨の日が多く、特に9日は大雨となった所があった。旬平均気温は高いから平年並。旬降水量は多く、県南部を中心にかなり多い。旬間日照時間は少ないから平年並。

[旬統計値（秋田）]

	気温 (℃)	平年差 (℃)	階級区分	降水量 (mm)	平年比 (%)	階級区分	日照時間 (h)	平年比 (%)	階級区分
7月上旬	22.7	+0.6	平 年 並	206.0	272	かなり多い	30.2	65	少 な い

(2) 本田の生育

1) 移植栽培

① 定点調査ほ（7月16日）の生育概況

各地域振興局による調査では、あきたこまち（64地点）は、草丈70.1cm（平年比110%）、㎡当たり茎数511本（同98%）、葉数11.9葉（平年差+0.8葉）、葉緑素計値43.3（平年比103%）であった。平年に比べ、草丈は長く、葉数は多く、葉緑素計値はやや高い。茎数は県北と県南はやや少なく、中央はかなり多く、地域間差がみられた。

ひとめぼれ（8地点）は、草丈70.5cm（平年比110%）、㎡当たり茎数561本（同99%）、葉数11.7葉（平年差+0.5葉）、葉緑素計値37.2（平年比98%）となっている。平年に比べ、草丈は長く、茎数と葉緑素計値は平年並、葉数は多かった。

表－1 定点調査結果（各地域振興局：7月16日）

品種	地区	草 丈			㎡当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
あきたこまち	県北	69.2	101	109	523	105	96	12.0	0.6	0.8	43.3	99	105
	中央	72.2	104	111	534	109	110	11.9	0.5	0.7	41.7	100	101
	県南	70.0	106	110	493	105	94	11.8	0.6	0.7	43.9	101	102
	全県	70.1	104	110	511	106	98	11.9	0.6	0.8	43.3	100	103
ひとめぼれ	中央	70.5	104	110	561	99	99	11.7	0.4	0.5	37.2	105	98

② 気象感応試験（幼穂形成期）の生育概況（あきたこまち）

本年の標植の幼穂形成期（幼穂長2mm）は、平年より4日早い7月6日だった。生育は、草丈61.6cm（平年比102%）、㎡当たり茎数684本（同120%）、葉緑素計値40.1（同96%）であった。減数分裂期は7月18日で、平年より4日早かった。

晩植の幼穂形成期も平年より2日早い7月11日になり、草丈61.6cm（平年比99%）、㎡当たり茎数545本（同105%）、葉緑素計値43.8（同105%）であった。

両区とも、平年に比べ茎数はやや～かなり多く、草丈は平年並だった。

表－2 気象感応試験（幼穂形成期）の生育概況

試験区	幼穂形成期	(平年差)	草 丈			㎡当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
			本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
標植	7月6日	(-4日)	61.6	96	102	684	98	120	11.2	+0.2	+0.2	40.1	97	96
晩植	7月11日	(-2日)	61.6	92	99	545	91	105	11.2	±0.0	+0.1	43.8	104	105

注1. 移植日：標植 5月15日、晩植 5月24日

注2. 調査日：標植 7月6日、晩植 7月11日

注3. 平年値は、標植はH12～R5年、晩植はH29～R5年の平均。

2) 直播栽培

①全県の生育概況

7月16日の定点調査による全県の生育概況は、草丈64.5cm（平年比114%）、㎡当たり茎数601本（同93%）、葉数11.1葉（平年差+1.0葉）、葉緑素計値42.5（平年比105%）であった。平年に比べ、草丈は長く、茎数は少なく、葉数は多く、葉緑素計値は高くなっている。

②農試直播作況ほ場の生育概況

7月16日の農試調査結果では、草丈70.9cm（平年比122%）、㎡当たり茎数523本（同83%）、葉数10.4葉（平年差+0.5葉）、葉緑素計値41.7（平年比103%）であった。平年に比べ、草丈は長く、茎数は少なく、葉数は多く、葉緑素計値はやや高くなっている。また、幼穂形成期は7月18日で、平年より1日早かった。

表－3 調査結果（湛水直播 あきたこまち、農試および農業振興普及課7月16日調査）

設置場所	草 丈			㎡当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
農 試	70.9	99	122	523	92	83	10.4	+0.2	+0.5	41.7	98	103
大館市	58.2	110	112	548	79	80	11.1	+0.5	+1.1	44.1	106	109
井川町	69.9	112	122	787	122	128	11.6	+2.6	+1.5	42.5	107	106
美郷町	63.8	108	111	603	106	92	11.0	+0.9	+0.8	42.3	110	105
横手市	59.9	107	104	545	92	83	11.1	+1.0	+0.9	41.8	106	104
全県	64.5	107	114	601	98	93	11.1	+1.0	+1.0	42.5	105	105
上限	58			700			10.5			46		
目標	56	—	—	600	—	—	10.0	—	—	44	—	—
下限	54			500			9.5			42		

注1) 平年値：過去10年間（H26～R5）の平均値

注2) 最下段は時期別目標生育量

（3）病害虫の発生概況

1) 葉いもち

全般発生開始期調査（7月8～11日）21地点では、発病地点率が0%（平年18.5%）で散生病斑密度は0個/100m×2条（平年0.05個/100m×2条）でいずれも低かった。

県内7地点での病斑増加調査（接種、無防除条件）では、県北部で7月8日、県中央部で7月9日、県南部で7月3日に病斑増加が確認された。これらの結果から今年の全般発生開始期は全県で7月9日頃であると推定され、平年（7月6日）より3日遅かった。その後、BLASTAM法では、7月8～10日頃に感染好適な気象が訪れたため、7月15～17日頃に第2世代の病斑が出現すると予想される。

今後、ほ場巡回に努め、病斑増加が認められた場合は直ちに防除を行い、穂いもちの発生要因となる上位葉の発病を抑える必要がある。

2) 斑点米カメムシ類

抽出ほ場調査（7月2～3半旬）における畦畔のすくい取り調査では、アカスジカスミカメのすくい取り数は17.0頭（平成4.0頭）、発生地点率は42.5%（平成27.1%）で高かった。アカヒゲホソミドリカスミカメのすくい取り数は4.9頭（平成3.4頭）でやや多く、発生地点率は52.5%（平成38.5%）で高かった。水田内雑草調査では、ノビエの発生密度は平成並、発生地点率はやや高かった。カヤツリグサ科雑草の発生密度はやや低く、発生地点率は低かった。

（令和6年7月17日発表 農作物病虫害発生予察情報 注意報 第1号を参照、以下「注意報 第1号」）

3) セジロウンカ

抽出ほ場調査（7月2～3半旬）における水田内の成虫すくい取り数は4.8頭（平成0.7頭）で多く、発生地点率は77.5%（平成15.0%）で高かった。発生は県内で広く確認された。

3 当面の技術対策（7月下旬～8月中旬）

各地域振興局による定点調査（7月16日）結果から、あきたこまちは平成より草丈は長いものの、葉数が多く、生育ステージが前進したことから長くなったと推定する。葉色はやや高めであり、幼穂形成期頃と推定した調査値による栄養診断から、県北、県南では生育過剰のほ場が多いとみられた。追肥体系のほ場では、倒伏に注意しながら葉色の急激な低下を招かないよう適切な追肥を実施する。

7月2半旬までの長雨により、中干しの進まないほ場が多くみられ、間断かん水に入っていないほ場も多い。これから穂ばらみ期～出穂期に入るため、土壌水分を切らさないよう、間断かん水や湛水管理を実施する。

また、斑点米カメムシ類の防除を徹底するほか、いもち病の発生やセジロウンカにも留意し、ほ場の状況を確認し、適期に防除する。

出穂を迎えるこれからの時期は、作柄を確保する上で重要な時期であり、高温や大雨など気象情報に注意しながら、きめ細かい管理に努める。

（1）気象変化に対応した水管理

幼穂形成期から出穂までの水管理は稲体の活力維持のため間断かん水が基本である。中干しを十分に実施できなかったほ場では、落水期間が長めの間断かん水を実施し、田面の硬度を確保する。

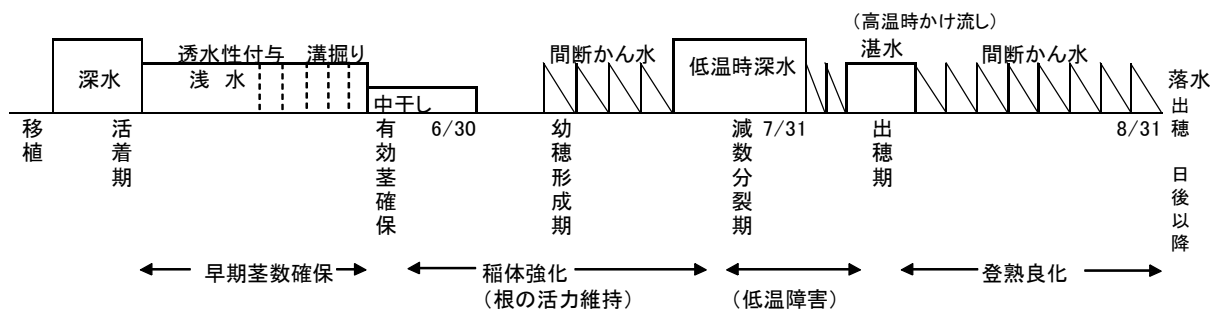
減数分裂期は、葉耳間長±0 cmの主茎が半分以上見られる頃で、一般的に出穂期前10～15日頃である。なお、気象感応試験の直近10年の調査では、減数分裂期～出穂期の日数は8日と短期化していることに留意して管理する。稲はこの時期の低温に最も弱く、日平均気温が20℃以下（最低気温17℃以下）では障害不稔を発生するおそれがあるので、低温時は深水管理（17～20cm）を行い幼穂を保護する。なお、用水の水温が気温より低い場合は逆効果になるので注意が必要である。

出穂の時期は稲が水を多く必要とするので、出穂したら10日間は湛水して水を切ら

さないように管理する。

その後は、間断かん水を基本とするが、気温が30℃以上になる場合は、かけ流しを行い地温を下げ、根の機能減退を防止する。用水の確保が難しい場合は、落水期間の短い間断かん水やかん水を日中に行うなど、水分供給と地温の低下に努める。また、フーン現象等で乾燥した風が強い日は、湛水状態を保ち、蒸散による稲体の水分消耗を軽減する。

(資料編p. 21～23、稲作指導指針p. 67～72参照)



(2) あきたこまちの出穂期の予測(7月15日現在)

7月16日以降の気温が平年並で経過した場合、中苗移植のあきたこまちの出穂期は、発育モデルにより表-4のとおり予測される。近年は、実際の生育ステージの方が予測より速く進む傾向にあるため、予測日を目安にし、ほ場観察により生育を見極め、追肥や病虫害防除等の栽培管理を適期に実施する(資料編p. 19～20参照)。

表-4 中苗移植のあきたこまちの出穂期予測

各地域の移植盛期	アメダス観測地点	減数分裂期	出穂期
県北 5月21日	大館	7月25日頃	8月3日頃
県中央 5月18日	大正寺	7月26日頃	8月4日頃
県南 5月24日	横手	7月25日頃	8月2日頃

(3) 生育・栄養診断に基づいた穂肥(資料編p. 21～23参照)

減数分裂期の追肥の要否は、幼穂形成期に実施した栄養診断結果に基づいて判断する。

幼穂形成期の生育・栄養診断でⅠ～Ⅳ型の生育型に該当した場合は、減数分裂期に窒素成分で2kg/10a追肥する。ただし、減数分裂期までに極端な葉色低下が見られる場合は、早めに追肥する。Ⅴ型の生育型に該当する場合は、ムラ直し程度に窒素成分で1kg/10a追肥する。

なお、過剰な追肥や減数分裂期を過ぎてからの追肥は、玄米のタンパク質含有率を高め、食味の低下につながるため行わない。

本年は葉色が濃く経過していることから、節間の伸長が懸念される。幼穂形成期の栄養診断により倒伏程度が2以上に判定された場合には、やむを得ぬ緊急手段として倒伏軽減剤の使用を検討する。(稲作指導指針p. 69参照)

(4) いもち病防除

1) 葉いもち

- ① 葉いもちが容易に確認できるほ場では、直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ノンブラス剤、ブラシン剤）による葉いもち追加防除を実施し、上位葉の発病を抑制する。
- ② 7月8日からの大雨で冠水したほ場では、稲体の抵抗力が低下して感染しやすい状態となっているため、注意する。

2) 穂いもち

- ① 葉いもちの発生が認められるほ場では、出穂15～7日前にコラトップ剤、またはゴウケツ粒剤／サンブラス粒剤の散布を行うか、出穂直前と穂揃期にトライフロアブル、ラブサイド剤、ビーム剤のいずれかの茎葉散布を行う。
- ② 葉いもちが多発しているほ場では、上述の①に加え、さらに、傾穂期にもラブサイド剤による追加防除を行う。
- ③ 育苗施設内外の衛生管理や、適正な育苗期いもち防除、及び本田葉いもち防除を広域的に実施し、葉いもちの発生がない場合は、穂いもち防除の必要はない。ただし、葉いもちが多発しているほ場が隣接している場合は、出穂期～7日後にトライフロアブルまたはラブサイド剤の茎葉散布を行う。
- ④ 薬剤の使用に当たっては、テブフロキン剤（トライ剤）の総使用回数は2回以内、フサライド剤（ラブサイド剤）の総使用回数は3回以内、トリシクラゾール剤（ビーム剤）の本田での総使用回数は3回以内であることに注意する。

(5) 紋枯病防除

- 1) 前年多発したほ場に限り、出穂20～10日前にモンガリット粒剤、または出穂15～5日前にリンバー粒剤を水面施用する。
- 2) 穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、バシタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかを株元に到達するように丁寧に茎葉散布する。出穂前の防除が効果的だが、多発が予想される場合は出穂以降にも散布する。
(令和6年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準（以下、防除基準）p.28を参照)

(6) 稲こうじ病防除

- 1) 前年多発したほ場では、出穂20～10日前にドイツボルドーA、ボルドー、トライフロアブル、Zボルドー粉剤DL、モンガリット粒剤のいずれかを散布する。
- 2) ドイツボルドーA、ボルドーは高濃度で散布すると薬害を生じやすい。
- 3) Zボルドー粉剤DLは高温時には薬害を生じやすいので夕方の涼しい時に使用する。

(7) 斑点米カメムシ類防除

1) 雑草管理

- ① 畦畔・農道、休耕田・法面等の草刈りはイネの出穂10日前までに地域一斉に行う。
- ② 出穂期10日後頃に行う茎葉散布剤の散布当日から散布7日後までに畦畔・農道の草刈りを実施し、増殖源となるイネ科雑草を除去する。

2) 薬剤散布

- ① イネの出穂期を確認し、出穂期10日後頃にアルバリン剤／スタークル剤の茎葉散布を行う。薬剤は畦畔を含めたほ場全体に散布する。
 - ② 出穂したホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場又は斑点米カメムシ類の発生源となるイネ科植物が主体の牧草地や休耕田等に隣接したほ場では、出穂期10日後頃の散布に加えて、同24日後頃にもエクシード剤またはキラップ剤による茎葉散布を行う。
- (「注意報 第1号」を参照)

(8) セジロウンカ防除

要防除密度は1株に中老齢幼虫が15頭以上である。ほ場の発生状況を観察し、要防除密度を超える場合は、トレボン剤等により直ちに防除を行う。

(9) カドミウム含有米の発生防止対策

カドミウム含有米の発生が懸念される地域では、カドミウムの吸収を抑制するために、出穂前後各3週間は常時水を張り、田面が空気に触れないようにする。

(資料編p. 23参照)。

(10) 農薬の飛散防止と安全使用の徹底

- 1) 農薬散布時は、周辺作物への飛散防止対策を徹底する。
- 2) 散布前に使用農薬のラベル等を熟読し、使用法を遵守する。
- 3) 健康管理や服装・装備等を万全にし、涼しい時間帯に散布する。
- 4) 農薬散布後は、防除器具の洗浄を確実に行う。
- 5) 防除履歴を必ず記録する。

(11) 農作業中の熱中症対策

- 1) 作業は、日中の気温の高い時間帯を外して行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くするなどの工夫する。
- 2) 喉の渇きを感じる前に、こまめに水分・塩分を補給する。
- 3) 単独作業は避け、複数人で作業を行うよう心がけて、時間を決めて連絡をとり合う。
- 4) 帽子や吸湿速乾性の衣服の着用や空調服や送風機を活用する。
- 5) 熱中症が疑われる場合には、作業を中断し、涼しい環境へ避難し水分を補給するなど応急処置に努める。症状が改善しない場合は早めに医療機関で診察を受ける。

【時期別・主要作業別指導事項】

月・旬	作業の種類	主 な 指 導 事 項
7月下旬 ～ 8月中旬	水管理 (気象変化に対応した水管理)	○幼穂形成期から出穂までは間断かん水とする。出穂したら10日間湛水状態で管理し、その後は再び間断かん水とする。 ○減数分裂期～穂ばらみ期は、低温に特に弱いため、低温時（日平均気温20℃以下、最低気温17℃以下）には深水管理（17～20cm）を徹底する。 ○出穂後に気温が30℃以上になる日は、かけ流しかん水を行う。用水の確保が難しい場合は、落水期間の短い間断かん水やかん水を日中に行うなど、水分供給と地温の低下に努める。
	生育・栄養診断の実施	○移植栽培では、ほ場毎に栄養診断結果に基づき追肥の量を決定する。 ○減数分裂期までに極端な葉色低下が見られる場合、早めに追肥する。 ○過剰な追肥や減数分裂期を過ぎてからの追肥は、食味低下を招くため行わない。
	いもち病の防除 (葉いもち・穂いもち)	○葉いもちが容易に確認できるほ場では、直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ノンブラス剤、ブラシン剤）による葉いもち追加防除を実施し、上位葉の発病を抑制する。 ○ほ場の検診を行い、葉いもちの発病状況に応じて穂いもち防除を実施する。
	紋枯病の防除	○前年多発したほ場に限り、出穂20～10日前にモンガリット粒剤、または出穂15～5日前にリンバー粒剤を散布する。 ○穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期に茎葉散布剤で防除する。
	稲こうじ病の防除	○前年多発したほ場では、出穂20～10日前にドイツボルドーA、ボルドー、トライフロアブル、Zボルドー粉剤DL、モンガリット粒剤のいずれかを散布する。
	斑点米カメムシ類の防除	○イネの出穂10日前までに農道・畦畔の草刈りを行う。 ○出穂期10日後頃に行う茎葉散布剤の散布7日後までに草刈りを行い、増殖源の除去に努める。 ○出穂期10日後頃にアルバリン剤／スタークル剤の茎葉散布剤を畦畔を含めたほ場全体に散布する。 ○出穂したホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場又は斑点米カメムシ類の発生源となるイネ科植物が主体の牧草地や休耕田等に隣接したほ場では、1回目の防除に加えて、出穂期24日後頃にもエクシード剤またはキラップ剤による茎葉散布を行う。
	セジロウンカの防除	○ほ場の発生状況を観察し、要防除密度を超える場合は、トレボン剤等により直ちに防除を行う。
	カドミウム含有米の発生防止対策	○カドミウム含有米の発生が懸念される地域では、出穂前後各3週間は湛水管理とする。
	農薬飛散防止と安全使用	○農薬散布時は、特に周辺作物への飛散防止対策を徹底する。 ○散布前に使用農薬のラベル等を熟読し、使用法を遵守する。 ○健康管理や服装・装備等を万全にし、涼しい時間帯に散布する。 ○農薬散布後は、防除器具の洗浄を確実にを行う。 ○防除履歴を必ず記録する。

大豆

生育に応じた適期の栽培管理を徹底

- － ほ場を観察して病虫害の適期防除 －
- － 雑草対策と排水対策の実施 －

1 リュウホウの生育概況（農業試験場 作況調査試験）

6月5日播種の7月12日現在の生育は、草丈48.8cm（平年比126%）、主茎節数8.4節（平年差+1.5節）、分枝数0.2本（同+0.1本）であった。

6月19日播種の7月12日現在の生育は、草丈31.3cm（平年比139%）、主茎節数5.0節（平年差+1.3節）であった。

表－1 農業試験場におけるリュウホウの生育概況

調査日	播種日	草丈(cm)			主茎節数(節)			分枝数(本)		
		本年	前年比(%)	平年比(%)	本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差
7/12	6/5	48.8	99	126	8.4	±0	+1.5	0.2	-0.2	+0.1
	6/19	31.3	113	139	5.0	+1.0	+1.3	0	0	±0

1) 平年値は6月5日播種は平成26～令和5年、6月19日播種は平成26～令和5年

2) 生育データはデントコーン-小麦-大豆の輪作畑における慣行栽培による

2 当面の技術対策（7月下旬～8月中旬）

（1）最終培土

培土は、倒伏軽減や雑草防除の観点からも重要な作業であるが、最終培土の時期が遅れると畦間の耕起・かく拌に伴う断根や、管理作業機の接触に伴う茎葉損傷により生育への悪影響のおそれがあるため、培土は開花の10日前には終了する。

表－2 に秋田県の大豆奨励（認定）品種の開花期（平年値）を示す。本年は生育が進んでおり、平年よりも開花期が早まると考えられるため、計画的に培土作業を行う。

表－2 秋田県の大豆奨励（認定）品種の開花期の平年値

播種期 \ 品種	リュウホウ	あきたみどり
5月25日	7月23日	7月26日
6月4日	7月27日	－
6月19日	8月3日	－

※秋田農試の大豆奨励品種決定調査における平均値

5月25日は過去10年間の平均値（リュウホウは平成20～29年、あきたみどりは平成19～28年）

6月4日播種は過去10年間の平均値（平成26～令和5年）

6月19日播種は過去10年間の平均値（平成26～令和5年）

(2) 排水対策の徹底

降雨による停滞水が速やかに排水されるよう、明きよの点検や補修を随時行う（令和6年6月28日発行の作況ニュース第4号参照）。

(3) 病虫害防除

今後の気象に注意し、ほ場の観察による病虫害の早期発見、防除に努める（防除基準p.50～56参照）。

- 1) 食葉性害虫（ツメクサガ、コガネムシ類、ウコンノメイガ等）やアブラムシ類は、ほ場の観察により早期発見に努め、発生状況に応じて防除する。
- 2) ハスモンヨトウの飛来数が多いため、今後、幼虫による食害が多くなるおそれがあることから、発生状況に応じて防除する。
（令和6年7月17日発表 農作物病虫害発生予察情報 防除対策情報 第8号を参照）
- 3) ウコンノメイガは、7月6半旬には場全体で40～60茎の葉巻数を調査し、茎当たりの葉巻数が1.3個以上確認された場合は、8月上旬までに防除する。
- 4) 近年、カメムシ類による子実被害が増加傾向にあるため、ほ場を観察し、発生状況に応じて防除する。
- 5) 排水対策を徹底して黒根腐病や茎疫病の発生を防ぐ。また、罹病株は早期に抜き取り処分し、病害の拡大を抑制する。
- 6) 紫斑病は開花期20～30日後に防除する。また、着莢期に降雨が多い場合は1回目防除の約10日後に追加防除を行う。

(4) 雑草対策

中耕・培土で雑草を抑えられなかった場合は、手取りまたは大豆生育期処理除草剤により雑草防除を行う。大豆生育期処理除草剤は、薬剤によって使用時期等が異なるため使用基準を遵守し、適期に防除する（防除基準p.343～350を参照）。

1) ノビエ、メヒシバ等のイネ科雑草

ナブ乳剤、ワンサイドP乳剤、ポルトフロアブルのいずれかを使用する。

2) タデ類、アメリカセンダングサ等の広葉雑草

大豆バサグラン液剤の効果が高い。ただし、適用品種はリュウホウに限る。

なお、大豆バサグラン液剤は、高温時や日射が強い場合、湿害等による生育不良のほ場で薬害が助長されることがあるため、散布日の天候や生育を考慮して散布する。

3) アレチウリ、アメリカアサガオ、マルバルコウ等のつる性の帰化雑草やシロザ等の広葉雑草

アタックショット乳剤の効果が高い。ただし、湿害等により大豆が軟弱気味に生育している場合や処理後に連続した降雨が予想される場合、処理後3日間の平均気温が17℃を下回ると予想される場合は強い薬害を生じるおそれがあるため使用しない。また、大豆6葉期（ただし開花前）までに使用する。

4) 取りこぼしのあった雑草や大型化する雑草、防除の難しい雑草（シロザ・エノキグサ・ツユクサ・イヌホオズキ・帰化アサガオ類・アレチウリ等）

バスタ液剤による畦間・株間処理または大豆バサグラン液剤、ザクサ液剤、ラウンドアップマックスロードによる畦間処理を行う。また、帰化アサガオ類やアレチウリ

に対してはバスタ液剤またはザクサ液剤を使用する。なお、バスタ液剤とザクサ液剤の成分は同一成分として総使用回数に数えるので注意する。

畦間・株間処理や畦間処理にあたっては、薬液付着に伴う薬害を防止するため、専用の飛散防止カバーや専用ノズルを必ず使用する。

(5) 開花期追肥

水田転換初年目畑や地力の高いほ場では必要ないが、長期にわたり大豆の連作を行っているほ場（土壌や根粒からの窒素供給力の低下が著しいほ場）や湿害により生育不良となったほ場では、窒素追肥効果が認められている。

追肥は、開花期（開花期～開花後10日頃）に硫安または尿素を用い、窒素成分で10a当たり5～10kg施用する。

（大豆指導指針（令和6年3月発行）p.24～27、66～69を参照）

(6) 開花期以降の土壌水分の保持

大豆は、開花～子実肥大期にかけて水分を多く必要とし、乾燥が続くと減収することがあるため、1）、2）の対策により、大豆の好適な地下水位（40cm程度）の保持に努める。

なお、著しい高温少雨に遭遇した場合、3）、4）にある畝間かん水や明きょへのかん水等の対策があるが、十分な用水量が確保でき、速やかな排水が行えるほ場など実施可能な条件に限られるため、ほ場条件を確認した上で実施を検討する。

1) 梅雨明け後の暗きょの操作

梅雨明け後は、暗きょ栓を閉めて土壌中の水分の保持に努める。ただし、まとまった降雨がある場合は、暗きょ栓を開いて排水を図る。

2) 地下かんがいシステムが備わっているほ場について

梅雨明け後は、暗きょ栓を閉めて地下水位を40cmに設定し、降雨を土壌に貯留するように努める。

地下かんがいは、晴天が1週間以上続き土が白く乾燥している場合や、日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見える等を目安に実施する。この時の地下水位は、20～30cm程度に設定し、1日給水した後、暗きょ栓を開放して排水する。

3) 畝間かん水の日安と留意点

畝間かん水は、晴天が1週間以上続き土が白く乾燥している、日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見える等を目安に実施する。

30a以上の大きなほ場の場合は、ほ場を2～3区画程度に分け、1日1区画ずつ2～3日に分けて実施し、畝の崩壊と水口付近の湿害を防ぐ。ほ場（区画）全体に水が行き渡ったら水口をしっかりと止め、速やかに排水する。なお、かん水は、気温・地温が低下する朝夕の時間帯に行う。

ただし、水回りが悪いほ場や、速やかな排水を行えないほ場では、湿害等が発生することがあるため実施しない。

4) 明きょへのかん水の日安と留意点

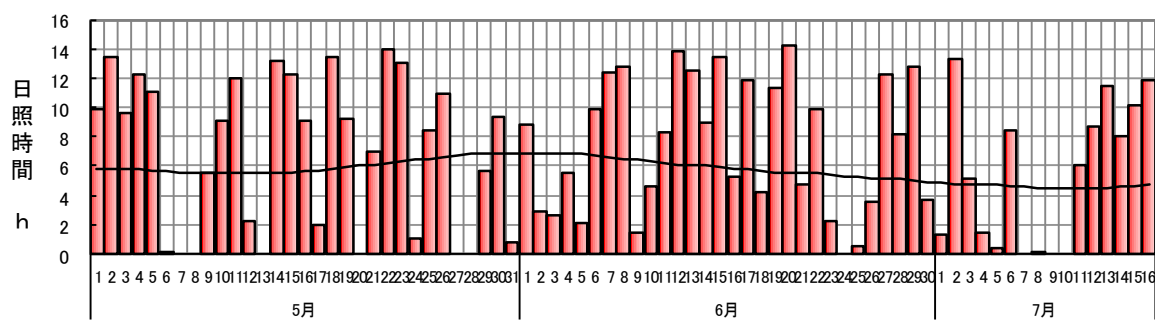
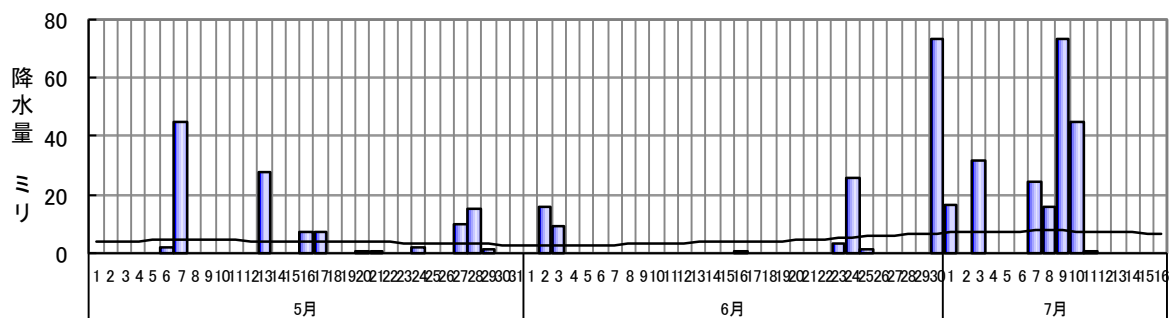
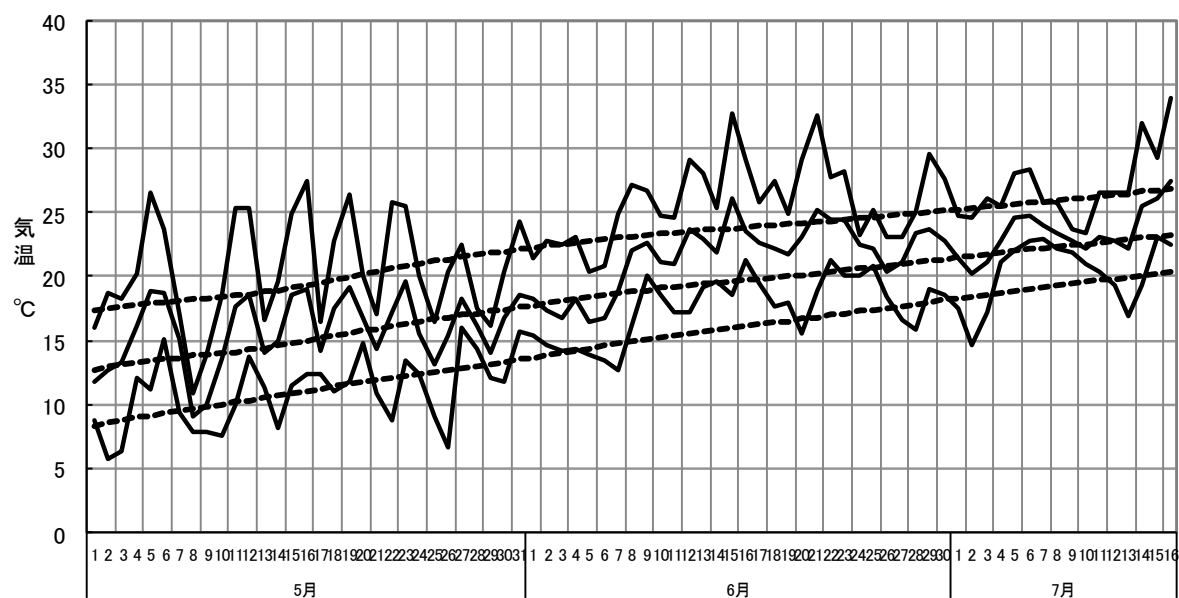
排水口を閉じ、明きょ全体に水を行き渡らせ、その後は速やかに排水する。

資 料 編

1 気象経過

(1) 令和6年5月1日から7月16日の気象経過図（観測地点：秋田地方気象台）

（資料 秋田地方気象台）

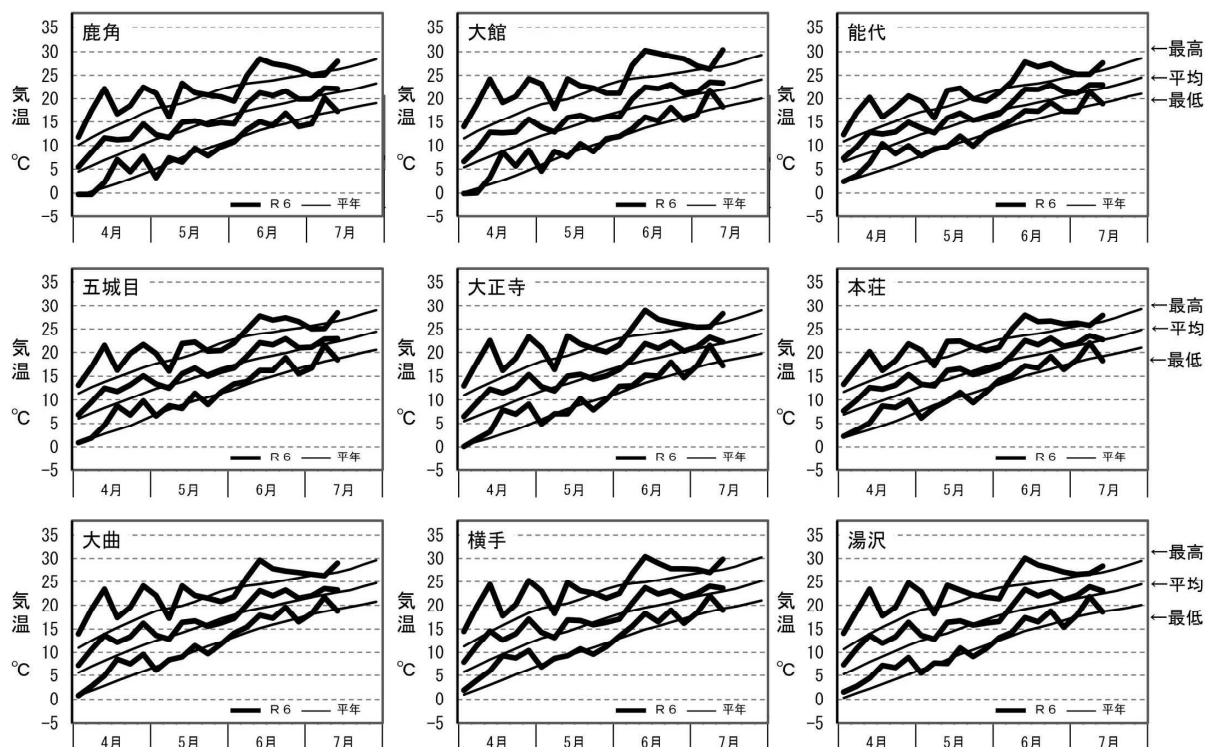


(2) 旬別気象状況 (秋田市)

(資料 秋田地方気象台)

項目	7月上旬	
	本年	平年比較
平均気温(℃)	22.7	+0.6
降水量(mm)	206.0	272%
日照時間(hr)	30.2	65%

(3) 各地域の気象(半旬平均気温、半旬降水量、7月3半旬まで)



2 定点調査結果 (各地域振興局調査 7月16日)

表ー1 定点調査結果 (品種: あきたこまち)

地域 振興局	調査点数	草丈			m当たり莖数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
鹿角	5	68.3	106	111	591	107	99	12.1	0.7	1.0	44.4	100	105
北秋田	9	70.1	104	109	566	117	104	12.0	0.5	0.7	44.2	104	109
山本	9	68.8	95	107	443	91	86	11.8	0.4	0.6	41.9	94	100
秋田	10	72.8	101	109	528	107	109	12.1	0.6	0.7	41.8	99	101
由利	2	69.1	120	118	562	117	118	11.2	0.5	0.5	40.9	103	99
仙北	10	70.0	107	111	500	103	96	11.9	0.6	0.9	44.7	104	108
平鹿	11	69.7	105	109	511	113	97	11.7	0.6	0.7	43.6	100	100
雄勝	8	70.5	106	110	458	98	88	12.0	0.9	0.8	43.1	99	98
全県平均	64	70.1	104	110	511	106	98	11.9	0.6	0.8	43.3	100	103
7月15日の 理想生育量		目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限
	県北	60	57	62	552	519	586	10.8	10.6	11.0	40	39	42
	中央	61	58	63	515	471	559	10.7	10.5	10.9	42	40	44
	県南	62	60	64	463	443	484	10.9	10.7	11.0	42	41	43

表－２ 定点調査結果（品種：ひとめぼれ）

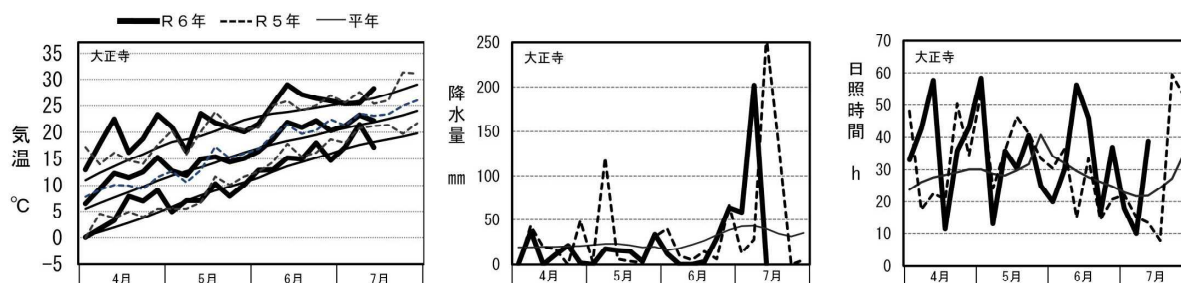
地域 振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
秋田	2	66.3	102	108	564	101	98	11.7	0.4	0.7	39.0	101	101
由利	6	71.9	104	110	559	98	100	11.7	0.4	0.5	36.6	106	98
中央地区平均	8	70.5	104	110	561	99	99	11.7	0.4	0.5	37.2	105	98

３ 関連成績

（１）気象感応試験

１）稲作期間の気象（～７月15日まで）

気温は７月２半旬に最低気温が高く経過し、３半旬は最高気温が高く経過した。降水量は７月１、２半旬に多く、中干しによる田面の乾燥が進まなかった。同時期の日照時間は平年より少なかったが、７月３半旬は多かった。



図－１ 令和6年の稲作期間中の気象経過（半旬別、7月15日現在）

２）幼穂形成期（幼穂２mm期）の生育概況（あきたこまち）

標植区の幼穂形成期は、平年より４日早い７月６日になり、草丈は平年並だが、茎数はかなり多く、葉緑素計値は平年よりやや低かった。晩植区の幼穂形成期も平年より２日早い７月11日になり、草丈は平年並、茎数はやや多く、葉緑素計値はやや高かった。

理想生育量と比べると、標植の茎数が過剰なことから、生育量（指数）と栄養診断値は理想生育の上限を超えており、生育型はⅤ－２に該当し生育過剰と診断された。晩植の生育量は理想生育の範囲にあり、葉緑素計値がやや高かったことから生育型はⅣの籾数やや多い診断になったが、概ね理想生育に近い生育だった。

表－３ 気象感応試験（幼穂形成期）の生育概況と生育診断

試験区	幼穂形成期	(平年差)	草 丈			㎡当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
			本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
標植	7月6日	(-4日)	61.6	96	102	684	98	120	11.2	+0.2	+0.2	40.1	97	96
晩植	7月11日	(-2日)	61.6	92	99	545	91	105	11.2	±0.0	+0.1	43.8	104	105
理想生育量*			58～63(cm)			471～559 (本)			10.5～10.9(葉)			40～44(SPAD値)		

注) 平年値は、標植はH12～R5年、晩植はH29～R5年の平均。

試験区	生育量($\times 10^3$)	栄養診断値($\times 10^5$)	生育型(診断結果)
標植	42.1	16.9	V-2型(生育過剰)
晩植	33.6	14.7	IV型(収数やや多い)
理想生育量*	32.2～37.0	11.9～14.2($\times 10^5$)	

* あきたこまちにおける幼穂形成期の理想生育量(中央地域)

注1. 移植日: 標植 5月15日、晩植 5月24日

注2. 調査日: 標植 7月6日、晩植 7月11日

注3. 平年値は、標植はH12～R5年、晩植はH29～R5年の平均。

3) 出葉状況

標植では、12葉と13葉の出葉が平年差－5日と－3日になり、徐々に鈍化しているが、平年より早い出葉である。晩植では、11葉の出葉が平年より3日早く、12葉の出葉も平年より4日早い。

表－４ 出葉期の平年比較（7月16日現在、気象感応試験）

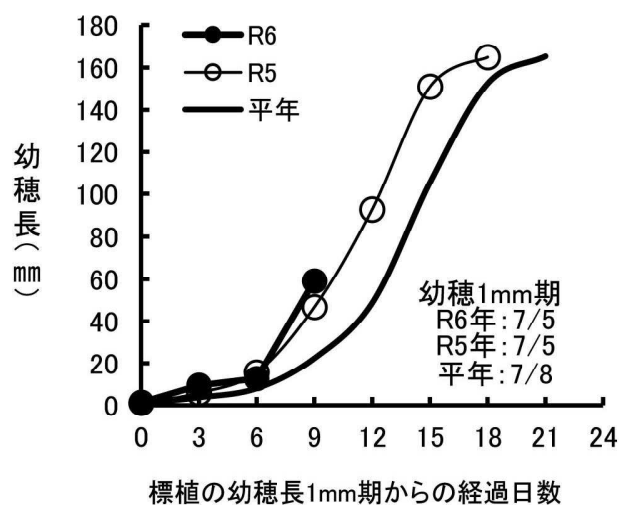
試験区	年次	出葉期								
		5葉	6葉	7葉	8葉	9葉	10葉	11葉	12葉	13葉
標植 (5月15日移植 基準)	R6	5/23	5/29	6/4	6/9	6/13	6/18	6/24	7/5	7/14
	R5	5/20	5/25	6/1	6/8	6/13	6/19	6/28	7/8	7/14
	平年	5/23	5/29	6/4	6/10	6/16	6/22	7/1	7/10	7/17
	平年差	±0	±0	±0	-1	-3	-4	-7	-5	-3
晩植 (5月25日移植 基準)	R6	5/31	6/5	6/10	6/14	6/20	6/24	7/2	7/10	
	R5	6/1	6/5	6/10	6/15	6/20	6/26	7/5	7/15	7/23
	平年	5/31	6/5	6/11	6/16	6/22	6/27	7/5	7/14	7/21
	平年差	±0	±0	-1	-2	-2	-3	-3	-4	

注: 標植の平年値は、H12～R5までの平均。晩植の平年値は、H29～R5年までの平均。

移植時葉数の平年値は標植は3.4葉、晩植は3.5葉。本年は標植は3.5葉、晩植は3.8葉。

4) 幼穂長の伸長状況

標植の幼穂長 1 mm期は、平年より 2 日早い 7 月 5 日で、1 mm期から 9 日目の幼穂長は 59 mmで、平年（22mm）よりかなり伸長している。



図－2 幼穂長の平年比較（7/14現在）

(2) 直播作況試験

1) 生育概況

7月16日の農試調査結果では、草丈70.9cm（平年比122%）、㎡当たり茎数523本（同83%）、葉数10.4葉（平年差+0.5葉）、葉緑素計値41.7（平年比103%）であった。平年に比べ草丈は長く、茎数は少なく、葉数は多く、葉緑素計値はやや高くなった。また、幼穂形成期は7月18日で、平年より1日早かった。

表－5 農試直播作況ほ場の生育概況（あきたこまち、湛水土中条播、5月10日播種）

調査 月日	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
7/16	70.9	99	122	523	92	83	10.4	+0.2	+0.5	41.7	98	103

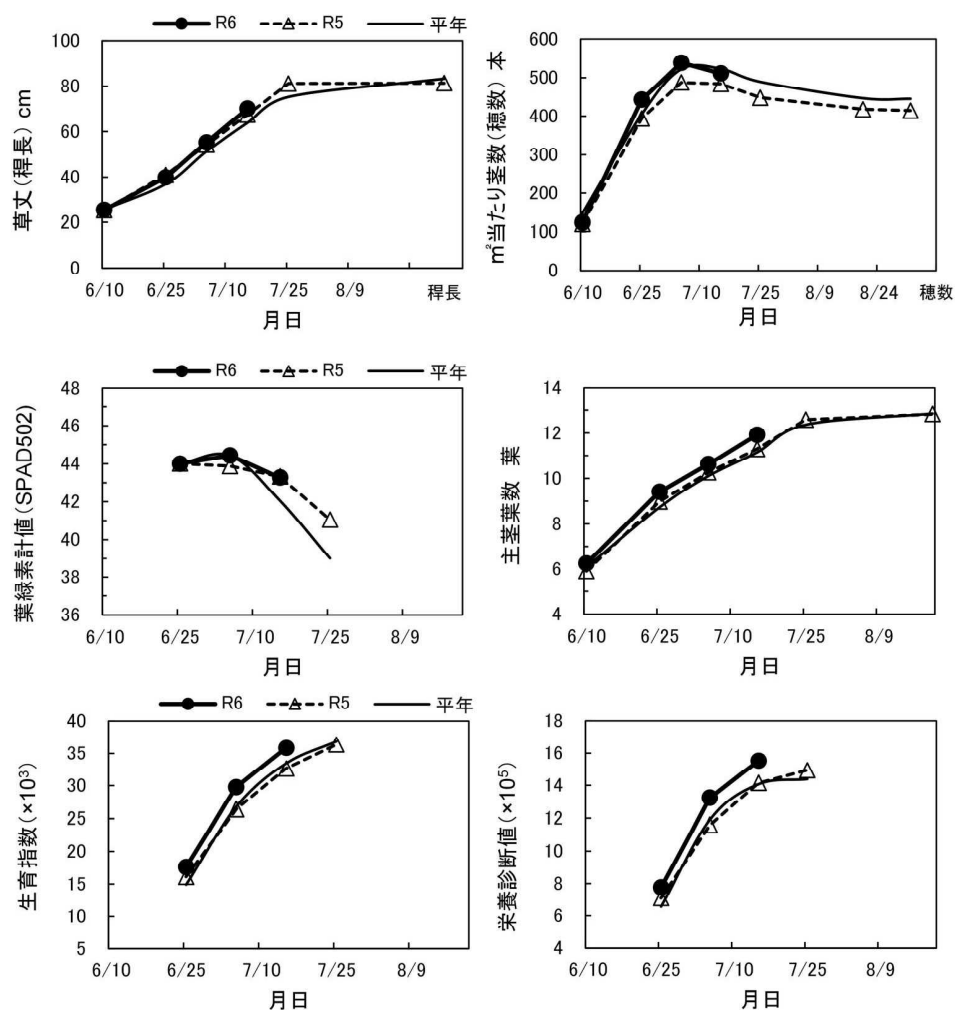
注1) 平年値: 過去10年間(H26～R5)の平均値 注2) 中干し期間: 6月28日～7月17日

4 今後の生育の見通しと栽培管理

(1) 本年の水稻生育の特徴（各地域振興局定点調査結果）

6月25日以降の全県平均の草丈は、平年をやや上回って経過している。一方、茎数は概ね平年並に経過しているものの、ほ場間差が大きく、茎数不足のほ場もある。葉緑素計値は平年よりやや高い傾向である。葉数は平年より多く経過しており、今後の生育ステージは、気象予報も考慮すると、やや早く進むと推定する。

生育指数と栄養診断値は平年を上回って経過していることから、ほ場毎の稲の生育型を把握し、今後の管理を適切に実施する。



図－3 各地域振興局定点調査（7月16日）結果（あきたこまち、全県平均）

生育指数＝草丈(cm)×茎数(本／㎡)

栄養診断値＝草丈(cm)×茎数(本／㎡)×葉緑素計値

(2) 減数分裂期の予測（あきたこまち）

近年、実際の生育ステージは、予測より早くなる傾向にあるため、ほ場観察で生育を見極め、適期の管理に努める。

表－6 発育モデルによるあきたこまちの減数分裂期の予測

アメダス 観測地点	移植時期	稚苗			中苗		
	5月〇日	7月16日以降の想定気温経過（平年の日平均気温に対する差）					
		+ 2℃	± 0℃	－ 2℃	+ 2℃	± 0℃	－ 2℃
鹿角	10日	7月26日	7月27日	7月28日	7月23日	7月24日	7月25日
	15日	7月28日	7月30日	7月31日	7月25日	7月27日	7月28日
	20日	7月31日	8月2日	8月4日	7月28日	7月29日	7月31日
	25日	8月2日	8月4日	8月7日	7月30日	8月1日	8月3日
大館	10日	7月22日	7月22日	7月23日	7月18日	7月19日	7月19日
	15日	7月24日	7月25日	7月26日	7月21日	7月22日	7月22日
	20日	7月27日	7月28日	7月30日	7月24日	7月24日	7月26日
	25日	7月30日	7月31日	8月2日	7月26日	7月27日	7月28日
鷹巣	10日	7月23日	7月23日	7月24日	7月20日	7月20日	7月21日
	15日	7月25日	7月26日	7月27日	7月22日	7月23日	7月24日
	20日	7月28日	7月29日	7月31日	7月24日	7月26日	7月27日
	25日	7月30日	8月1日	8月3日	7月27日	7月28日	7月30日
能代	10日	7月22日	7月23日	7月23日	7月19日	7月19日	7月20日
	15日	7月25日	7月26日	7月27日	7月21日	7月22日	7月23日
	20日	7月27日	7月29日	7月30日	7月24日	7月25日	7月26日
	25日	7月30日	7月31日	8月2日	7月26日	7月27日	7月29日
大潟	10日	7月21日	7月21日	7月22日	7月17日	7月18日	7月18日
	15日	7月23日	7月24日	7月25日	7月20日	7月20日	7月21日
	20日	7月26日	7月28日	7月29日	7月23日	7月24日	7月25日
	25日	7月29日	7月30日	8月1日	7月25日	7月26日	7月28日
秋田	10日	7月19日	7月20日	7月20日	7月16日	7月16日	7月16日
	15日	7月22日	7月23日	7月24日	7月19日	7月19日	7月20日
	20日	7月25日	7月26日	7月27日	7月22日	7月22日	7月23日
	25日	7月28日	7月29日	7月30日	7月24日	7月25日	7月26日
大正寺	10日	7月24日	7月25日	7月26日	7月21日	7月22日	7月23日
	15日	7月27日	7月28日	7月29日	7月24日	7月25日	7月26日
	20日	7月29日	7月31日	8月1日	7月26日	7月27日	7月29日
	25日	8月1日	8月2日	8月4日	7月28日	7月29日	7月31日
本荘	10日	7月21日	7月22日	7月23日	7月18日	7月19日	7月19日
	15日	7月24日	7月25日	7月26日	7月21日	7月21日	7月22日
	20日	7月27日	7月28日	7月29日	7月23日	7月24日	7月25日
	25日	7月29日	7月31日	8月1日	7月26日	7月27日	7月28日
大曲	15日	7月23日	7月24日	7月25日	7月20日	7月20日	7月21日
	20日	7月26日	7月27日	7月29日	7月23日	7月23日	7月24日
	25日	7月29日	7月30日	8月1日	7月25日	7月26日	7月27日
	30日	7月31日	8月2日	8月4日	7月27日	7月29日	7月30日
角館	15日	7月24日	7月25日	7月26日	7月21日	7月22日	7月23日
	20日	7月27日	7月28日	7月30日	7月24日	7月25日	7月26日
	25日	7月30日	7月31日	8月2日	7月26日	7月27日	7月28日
	30日	8月1日	8月3日	8月5日	7月28日	7月29日	7月31日
横手	15日	7月22日	7月23日	7月24日	7月19日	7月19日	7月20日
	20日	7月25日	7月26日	7月27日	7月22日	7月22日	7月23日
	25日	7月28日	7月29日	7月31日	7月24日	7月25日	7月26日
	30日	7月30日	8月1日	8月3日	7月26日	7月27日	7月29日
湯沢	15日	7月24日	7月24日	7月25日	7月20日	7月21日	7月21日
	20日	7月26日	7月28日	7月29日	7月23日	7月24日	7月25日
	25日	7月29日	7月30日	8月1日	7月25日	7月26日	7月28日
	30日	8月1日	8月2日	8月4日	7月28日	7月29日	7月31日

注）日平均気温は7月15日まではアメダス観測地のデータ、16日以降は平年値を用いた。

(3) 出穂期の予測（あきたこまち）

前頁と同様に実際の生育ステージは、予測より早くなる傾向にあるため、ほ場観察で生育を見極め、適期の管理に努める。

表－７ 発育モデルによるあきたこまちの出穂期の予測

アメダス 観測地点	移植時期	稚苗			中苗		
	5月〇日	7月16日以降の想定気温経過（平年の日平均気温に対する差）					
		+ 2℃	± 0℃	－ 2℃	+ 2℃	± 0℃	－ 2℃
鹿角	10日	8月4日	8月7日	8月9日	8月1日	8月3日	8月5日
	15日	8月7日	8月9日	8月12日	8月3日	8月5日	8月8日
	20日	8月10日	8月12日	8月15日	8月5日	8月8日	8月11日
	25日	8月12日	8月15日	8月18日	8月7日	8月10日	8月14日
大館	10日	7月31日	8月1日	8月3日	7月27日	7月28日	7月30日
	15日	8月3日	8月4日	8月7日	7月29日	7月31日	8月2日
	20日	8月5日	8月7日	8月10日	8月1日	8月3日	8月5日
	25日	8月8日	8月10日	8月13日	8月3日	8月5日	8月8日
鷹巣	10日	8月1日	8月3日	8月4日	7月28日	7月30日	7月31日
	15日	8月3日	8月5日	8月8日	7月30日	8月1日	8月3日
	20日	8月6日	8月8日	8月11日	8月2日	8月4日	8月6日
	25日	8月9日	8月11日	8月14日	8月4日	8月6日	8月9日
能代	10日	7月31日	8月2日	8月3日	7月27日	7月29日	7月30日
	15日	8月3日	8月4日	8月7日	7月30日	7月31日	8月2日
	20日	8月5日	8月8日	8月10日	8月1日	8月3日	8月5日
	25日	8月8日	8月10日	8月13日	8月3日	8月5日	8月8日
大潟	10日	7月30日	7月31日	8月2日	7月26日	7月27日	7月29日
	15日	8月2日	8月3日	8月5日	7月28日	7月30日	8月1日
	20日	8月5日	8月7日	8月9日	7月31日	8月2日	8月4日
	25日	8月7日	8月9日	8月12日	8月2日	8月4日	8月7日
秋田	10日	7月29日	7月30日	7月31日	7月24日	7月25日	7月27日
	15日	7月31日	8月2日	8月3日	7月27日	7月28日	7月30日
	20日	8月3日	8月5日	8月7日	7月30日	7月31日	8月2日
	25日	8月6日	8月8日	8月10日	8月1日	8月3日	8月5日
大正寺	10日	8月2日	8月4日	8月6日	7月30日	7月31日	8月3日
	15日	8月5日	8月7日	8月9日	8月1日	8月3日	8月5日
	20日	8月7日	8月10日	8月13日	8月3日	8月5日	8月8日
	25日	8月10日	8月12日	8月15日	8月5日	8月7日	8月10日
本荘	10日	7月30日	8月1日	8月3日	7月27日	7月28日	7月29日
	15日	8月2日	8月4日	8月6日	7月29日	7月30日	8月1日
	20日	8月5日	8月7日	8月9日	7月31日	8月2日	8月4日
	25日	8月7日	8月9日	8月12日	8月3日	8月4日	8月7日
大曲	15日	8月1日	8月3日	8月5日	7月28日	7月30日	7月31日
	20日	8月4日	8月6日	8月8日	7月31日	8月1日	8月3日
	25日	8月7日	8月9日	8月11日	8月2日	8月4日	8月6日
	30日	8月9日	8月12日	8月15日	8月4日	8月6日	8月9日
角館	15日	8月3日	8月4日	8月6日	7月29日	7月31日	8月2日
	20日	8月5日	8月7日	8月10日	8月1日	8月3日	8月5日
	25日	8月8日	8月10日	8月13日	8月3日	8月5日	8月7日
	30日	8月10日	8月13日	8月16日	8月5日	8月7日	8月10日
横手	15日	7月31日	8月2日	8月4日	7月27日	7月28日	7月30日
	20日	8月3日	8月5日	8月7日	7月30日	7月31日	8月2日
	25日	8月6日	8月8日	8月10日	8月1日	8月3日	8月5日
	30日	8月8日	8月10日	8月13日	8月3日	8月5日	8月8日
湯沢	15日	8月2日	8月3日	8月5日	7月28日	7月30日	8月1日
	20日	8月5日	8月6日	8月9日	7月31日	8月2日	8月4日
	25日	8月7日	8月9日	8月12日	8月2日	8月4日	8月7日
	30日	8月10日	8月12日	8月15日	8月5日	8月7日	8月10日

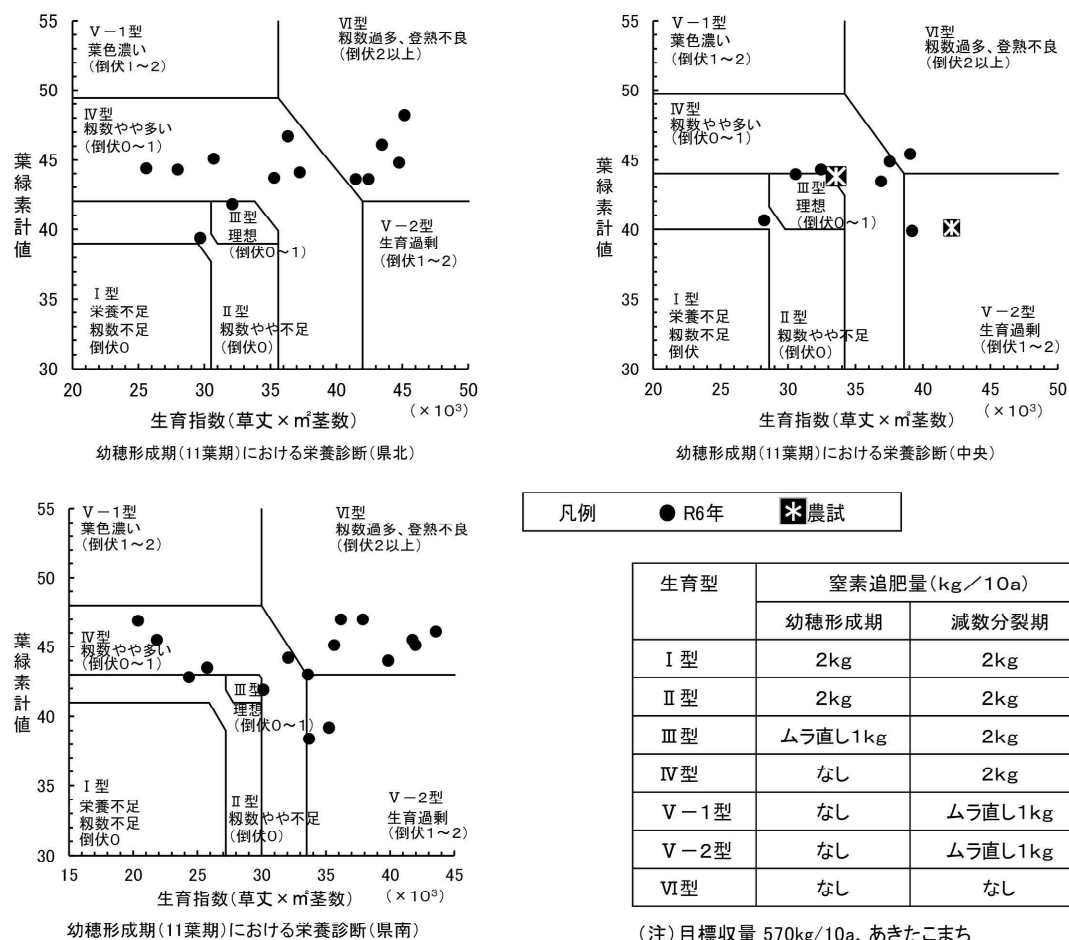
注) 日平均気温は7月15日まではアメダス観測地のデータ、16日以降は平年値を用いた。

(4) 水稻定点ほ場のあきたこまちの幼穂形成期における生育・栄養診断

1) 幼穂形成期における栄養診断と倒伏

各地域振興局による定点調査（7月5日および16日）結果から、葉数から見て幼穂形成期頃と推定した地点における、地域別の栄養診断をみると、中央地区はⅢ型とⅣ型が多く、概ね理想的な生育範囲にあった。県北と県南はⅣ型とⅥ型が多く、特に県南でⅥ型（生育量大、葉色濃）が多い。

生育が平年より早く進んでいることから、追肥体系ほ場では、倒伏を考慮し、慎重に作業する。



図－4 幼穂形成期頃の栄養診断（稲作指導指針p. 69～72）

（各地域振興局定点調査結果より、7月5日および16日調査結果のうち葉数10.9～11.8葉の範囲にあるほ場を抽出）

(5) 減数分裂期（葉耳間長±0 cm頃）の窒素追肥

減数分裂期の目安は、止葉（ n ）とその前葉（ $n-1$ ）の葉耳が重なる時期である。この時期は、出穂10～12日前頃に相当し、穂肥の適期である。幼穂形成期の栄養診断に基づき窒素追肥の判定を行う。

表－8 減数分裂期の地域別理想生育(稲作指導指針p. 70～71)

理想生育量（あきたこまち、目標収量570kg/10a）				
地域		県北	中央	県南
項目		7/25	7/25	7/25
草丈 （cm）	上限	74	72	75
	理想	72	70	74
	下限	69	69	72
茎数 （本/㎡）	上限	529	527	454
	理想	504	491	437
	下限	479	456	420
葉数	上限	12.2	12.2	12.5
	理想	12.0	11.9	12.3
	下限	11.8	11.7	12.1
葉緑素計値	上限	40	39	39
	理想	39	38	38
	下限	38	36	37
生育量 （×10 ³ ）	上限	38.4	37.0	33.5
	理想	36.2	34.4	32.3
	下限	33.9	32.2	30.8
栄養診断値 （×10 ⁵ ）	上限	15.0	14.2	13.0
	理想	14.0	13.1	12.3
	下限	13.0	11.9	11.7

(6) 水管理の要点

幼穂形成期以降は間断かん水が基本である。出穂当初は水を多く必要とする時期なので、出穂後10日間は湛水して水を切らさないように管理する。

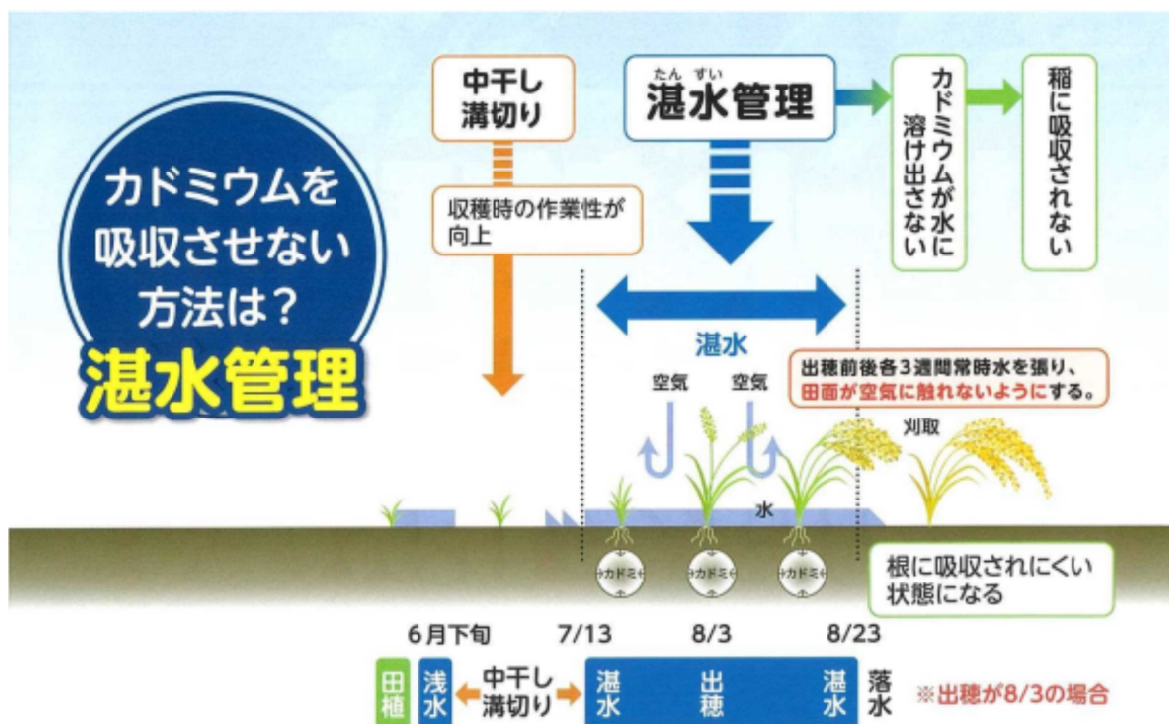
1) 高温条件

出穂後の20日間の平均気温が27℃（最低気温が23℃）を超える場合は、白粒等の発生による品質低下が懸念される。出穂から10日間程度は5～6 cmの湛水管理として、その後は間断かん水とするが、最高気温が30℃を超える場合は用水のかけ流しを実施するなど、出穂後の気象条件にあわせた水管理を心掛ける。なお、用水の確保が難しい場合は、落水期間の短い間断かん水やかん水を日中に行うなど、水分供給と地温の低下に努める。（稲作指導指針p. 115～118）

2) 低温条件

日平均気温が20℃以下（最低気温17℃以下）の日が続き日照時間の少ない冷害気象条件下では、冷温感受性期間（減数分裂期～穂ばらみ期）に幼穂を水面下に保つことにより冷害を回避する。前歴深水かんがいとは、幼穂形成期から減数分裂期直前まで（前歴期間）の期間に水深を10cm程度に保つことで、冷害防止効果が大きい技術である。減数分裂期（危険期）に低温が予想される場合、水深を17～20cm程度の深水に管理する。ただし、かんがい水温が気温より低い場合は逆効果になるので注意が必要である。

（稲作指導指針p. 67～68、119～123）



湛水管理のポイント

- 6月下旬から「中干し」を開始！ その際、強い中干しは避ける！
- ぬかりやすく、水はけが悪い水田では、中干しの際に「溝切り」を実施する！
- 「出穂前後各3週間」は常時水を張り、田面に空気を触れさせない！ 完全落水は遅めにする！

～汚染米が発生すると～

基準値を超えた米は、**湛水管理の実施を条件**として、県が買入処理を行います。
ただし、同一生産者において、汚染米が連続発生した場合、**県の買入価格が減額**となります。

○ 2年連続発生 …… 通常買入価格の1／2の価格

○ 3年以上連続発生 …… 通常買入価格の1／3の価格

(例) 通常買入価格が、6,000円/30kgの場合 2年連続発生 …… 3,000円/30kg
3年連続発生 …… 2,000円/30kg

※出荷の際は、一団のほ場別に、**150袋(30kg)以下で出荷**しましょう。

この印刷物は39,000部作成し、作成経費は1部当たり2.23円です。 令和6年5月作成

(お問い合わせ先) 秋田県農林水産部水田総合利用課・地域振興局農林部・市町村・JAへ

リサイクル推進(A)
この印刷物は、印刷後の回収へ
リサイクルできます。

各地域における技術情報等のお知らせ

各地域における技術情報等についての問い合わせは、最寄りの地域振興局農林部農業振興普及課に電話またはFAXでお願いします。

各地域振興局	電話番号	FAX番号
鹿 角 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-23-3683	0186-23-7069
北秋田 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-62-1835	0186-63-0705
山 本 地域振興局農林部農業振興普及課	0185-52-1241	0185-54-8001
秋 田 地域振興局農林部農業振興普及課	018-860-3410	018-860-3363
由 利 地域振興局農林部農業振興普及課	0184-22-8354	0184-22-6974
仙 北 地域振興局農林部農業振興普及課	0187-63-6110	0187-63-6104
平 鹿 地域振興局農林部農業振興普及課	0182-32-1805	0182-33-2352
雄 勝 地域振興局農林部農業振興普及課	0183-73-5114	0183-72-6897

〇SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）LINEで情報発信を行っています

秋田県稲作技術情報

「秋田の米ぢから」



水稻栽培に関する情報をリアルタイムで発信しています。

<主な配信内容>

- ・ 秋田県内の水稻の生育状況
- ・ 水稻および大豆の技術情報
- ・ 異常気象対策
- ・ その他、秋田米に関する情報



こちらのQRコードから登録できます

記事についてのお問い合わせは

秋田県農業試験場

作物部

生産環境部

秋田県病虫害防除所

秋田地方气象台

東北農政局秋田県拠点 統計担当

秋田県農林水産部水田総合利用課（農産・複合推進チーム）

園芸振興課（調整・普及チーム）

TEL 018-881-3330

内線(422・423・424)

内線(306・310)

TEL 018-881-3660

TEL 018-864-3955

TEL 018-895-7303

TEL 018-860-1786

TEL 018-860-1801

【次回の発行日は8月23日（金）の予定です】